



冬が来る
前に



川崎ゆきお

「冬になるとそれが現れる。木枯らしの吹く頃、冬の入り口だ。木枯らしと一緒に現れるのじゃ」

「共にですか」

「枯れ葉が舞うようにな。ただその女は舞わない。踊りはせんが、ゆるりと歩いておる。長いコートで襟を立て、髪の毛も長い。唇はタラコで大きい。頬と額が 出っ張り、目は細長くどこまで切れ込んでいるのか分からぬほど。眉は濃く、当然面長で、背も高い」

「化け物ですか」

「その類じゃよ。妖怪人間じゃ」

「妖怪のような人間。しかも女性」

「うむ」

「単体ですか」

「単体？」

「一人ですか。同類は一緒じゃないのですか」

「ぽつりと一人」

「妖怪女ですね」

「妖女というには色が足りぬ。帽子でもかぶり、髪の毛を隠せば男のようにも見える」

「肩幅も広く立派なのですね」

「ああ、大柄で、骨の太そうな、顔色は土色」

「まあ、妖怪なので、そんなものでしょ。人間と妖怪の間ぐらいですか」

「見た目は妖怪ではない。人だ。誰が見てもな。しかし、木枯らしの吹く歩道を落ち葉を踏み、また、舞う赤や黄色の葉と共に歩く姿を見たとき、これほど不吉なものはない」

「はい」

「遅い目の秋祭りが終わり、御輿の巡行も終わってしばらくの頃じゃ。虫送りと言って、そういうややこしいのは一緒に流したはずなのじゃが、あの女には効かん」

「そ、それは」

「種類が違うからじゃ。出所がな」

「何か人に災いを」

「ない。ないが、口裂け女のような後味が残る。彼岸花をいきなり見たときのように不吉で毒々しい」

「彼岸花、曼珠沙華、またの名を女郎花と言いませんか」

「女郎花はオミナエシじゃ」

「あ、はい。それで、何をしに」

「分からんが、そういう女が歩いているのを見ると、その年の瀬は凶じゃ。無事年が越せるかどうかじゃな」

「その女の謂われはないのですか。新しい妖怪のようですが」

「今時和服の妖怪など出んわ」

「あ、はい」

「人間になりたいと呟いている」

「半妖怪ですからねえ」

「人並みになりたいという意味かかもしれん」

「じゃ、かわいそうな人なんじゃないですか」

「それが露出しすぎておる。黙って物陰で悲しんでおればいいのに、表通りの歩道で身を晒しておる。まるで、見てくれとばかりにな」

「なぜ冬なのですか」

「冬には出ん」

「冬が来る前にですね」

「木枯らし一号が吹いた日に出ることが多い。冬になりつつある頃じゃ」

「その女性は何が目的なのですか」

「それが分からぬから怖い。何か恨みがあるのか、自暴自得なのか、悪い因果なのか、それさえ分からぬ」

「今年も出ますか」

「冬が来る前に見たいものじゃ」

「縁起が悪いんじゃないのですか、見ると」

「今年の服装が見たい。着ているコート類で、この冬の寒さが分かるんじゃ。それに流行物を着ておる。真っ白なダウンコートの年もあった。雪の女王のようにな」

「毎年着ているものが違うのですね」

「同じ場合もあるが、変えてくる年もある」

「あのう」

「なんじゃ」

「ふつうの通行人かもしれませんよ」

「そうか」

了